事柄に勇ましく発言するにいたったのも、当然の帰結であった。

寛政元（一七八九）年三月、還暦を迎えた宣長は、門人の請いを受けて名古屋まで出かけて国学を講義し二十余名の門下生を獲得している。『秘本』と『玉くしげ』を治貞に提出した一年三カ月後のことである。以後、七十二歳までの十二年間に、前後十回にもおよぶ「古道宣揚」の旅のはじまりである。

前年の天明八（一七八八）年末までの門人数の合計は、百六十四名にすぎなかった。宣長の門人は、最終的には四百九十余名にまでふくれ上がるが、それは次第に高まってきていた彼の令名と名古屋への旅以後、積極的に行なわれた門人獲得運動の成果で、十二年間で三百三十数名の門人が集まったことになる。治貞への「提言」によって、彼の「現実参加」への情熱が一層激しくかきたてられた結果か、儒仏をはげしく攻撃し、〈古の道〉を語り、〈まことの道〉を歩むべきことを熱心に説きつづけたのである。

とはいえ、〈まことの道〉は、それを現実の世界に適用したことで、その馬脚を現わす結果になった。〈古の道〉は、『古事記』という仮構の世界で追求されていたために、多少の違和感と滑稽感はあったにせよ、まだ一種の救いがあった。だが、〈まことの道〉の場合は、それを家康や幕藩体制、さらには紀州藩にまで適用させたことで、彼の思い描いた世界の正体とその限界が、はからずもあぶり出される結果となった。

宣長には、家康の天皇対策の実態などは最初から理解できなかった。幕藩体制のもつさまざまな矛盾やその限界も理解できなかった。現実の世界を支配し統一してゆくための複雑な機構、あるいは恫喝し、慰撫し懐柔するといった政治家特有のかけひきは彼の理解をこえたものであった。魑魅魍魎が闊歩するそのような現実の世界は、彼には最初から理解できるはずがなかった。みずからが思い描く理想を現実界に照射することに急な宣長は、現実界からは何一つ謙虚に学ぼうとはしなかったからである。彼は〈古の道〉という虚構のイメージを現実界に投影し、そのイメージにいろどられた世界の実現を夢想したにすぎない。〈古の道〉を無理に現実の世界の中に見出したいばかりに歴史的事実をねじ曲げ、金銀経済を否定し、物々交換を奨励し、素朴な上代への懐古趣味に支えられた〈まことの道〉を称揚したにすぎない。そのような宣長の目に映じた日本の姿に客観的な正確さを求めることなどは、最初から期待するほうがまちがっていた。

だが、もしそうであるとするなら、そのような彼の現実認識を土台としてみちびき出された〈まことの道〉がどのような性質のもので、その限界がどこにあったのか、また、そのような「提言」をした宣長がいかなる状況にあり、何をめざしていたかということも、おのずから理解できるであろう。

から実際的効用は疑わしかった。その保守的な言辞は、藩主たちの耳に快くひびいたにしても、それほど目新しいものを含んでいたわけではなく、〈まことの道〉などという耳なれない言葉には、むしろうさんくささすら感じられたのではなかろうか。

宣長の立場は、天皇制擁護と幕藩体制の全面的容認であり、その保守的姿勢は歴然としていた。そのような立場にあれば、町人や百姓の「奢り」をきびしく批判し、町人の経済活動そのものを否定するのは当然であった。そのかぎりでは、彼は町人を裏切り、同時に、みずからの根底を否定していたことになる。彼が『秘本』の刊行を禁じ容易に他見を許さなかったのも、藩主に提出したものだからという理由とはべつに、町人や百姓に対するあけすけな批判に彼自身、内心忸怩たるものがあったからであろう。

身近な周囲の人々を痛烈に批判し、その現実の姿を否定する以上、彼が一種の「根無し草」として松坂という伊勢商人の本拠地の表面をただよいつづけたのも当然であった。そして、そのような不安定な自分を鼓舞するかのように、〈もののあはれ〉を知るとか、〈古の道〉とか、〈まことの道〉という大袈裟な言葉をふりかざして現実に立ち向かった。そのことで、彼は「根無し草」である自分をどこかべつの位置につなぎとめ、確固たる存在たらしめようとしたのである。〈まことの道〉の場合は、それを歴史的事実に適用し、幕藩体制の一翼をになう治貞の機嫌をとり、宣長自身を権力者側に位置づけるために積極的に援用している。いいかえれば、権力者側へのあからさまな接近行動の現われとしての『秘本』であり『玉くしげ』であった。

だが、それにしても、彼の「提言」は一体だれのためのものであったのか。天明の大飢饉という苛酷な現実を前に、百姓一揆や「打ち壊し」がつづく異常事態のさなかにあって明確な打開策を何一つ打ち出すことができず、幕藩体制の裂け目を露呈していた幕府や紀州藩をあえて支持し力づけることが、町の一介の国学者にとってなにほどの意味をもっていたのか。

京都遊学中の宣長は、学友の清水吉太郎に宛てた手紙のなかで「今吾人、国の為む可き無し焉。民の安んず可き無し焉」云々と書き、「聖人の道」は、所詮、為政者のものでしかなく、治めるべき国もなければ安心させるべき民もいない自分には、儒者たちのいう「聖人の道」など関係がないと述べ、毅然とした姿勢を示した。爾来、三十数年、宣長はかつて激しく退けた為政者の発想に、いつのまにかのめり込んでいたことになる。

彼の「提言」は領民を思ってのものというより、自己顕示欲の濃厚なものである。政治には素人の彼の発言に、現実的な有効性は最初から期待できなかった。京都遊学から帰った直後、松坂の町で、伊勢商人の旦那衆を相手に『源氏物語』を講義していた頃の宣長は、彼らを相手に優雅に王朝の世界に遊んでいた。けれども、『古事記』研究と〈古の道〉称揚と前後して、彼の世界には現実界が色濃く支配するように変わっていた。元来は不得意だった政治向きの

個所に「定住」し、作物を育て、その収穫を待つ、自然相手の農業とは根本的に異なっている。消費者の欲求を刺激し、新たな需要を喚起しなければならない商人は、顧客の前に、目先を変えた珍しい商品を提供しつづけなければならないからである。

『秘本』における彼の「提言」が、吉宗の「享保の改革」の精神と同じ発想で語られていた理由もそこにあった。単に為政者に対する同調や媚態というだけではなく、まぎれもなく、それは彼の真情の吐露であった。「定住者」的発想を基本とする彼は、表面的な変化の底を流れる上代以来不変の存在に視線を凝らしつづけた。彼には、百姓や町人たちがその本来あるべき姿から逸脱していることに我慢がならなかった。物事の基本や根本という不変の本質こそが彼には重要で、現実などはどうでもよかった。そのような重要な存在が、時代の流れとともに変化してしまうことに我慢がならなかったのである。

現実を前にしたときの観念的な態度は、彼の現実認識のしかたにも如実に現われている。現実は、彼の観念的な視線を通してしかその前に姿を現わさなかった。かくあるべし、という彼の思いこみだけが先行し、理想との間の落差だけが気になり、つねに不満足なもの、欠陥のあるものとしての現実が目の前にあった。したがって、当時進行中であった地元の伊勢商人たちによる活発な商品流通経済の動向も、その本質的な側面までは目に入らなかった。それは、農業中心の幕藩体制に破綻が生じていたにもかかわらず、なおも質素倹約や勤倹尚武といった精神主義に頼るしかなかった徳川幕府や藩主治貞の発想と同種のものであった。彼の「提言」は、吉宗をはじめとする指導者たちのそれとさして変わり映えするものではなかった。

だが、それにしても、なぜ、彼はそのような「提言」をしたのか。〈古の道〉、あるいは〈まことの道〉を宣揚する機会を積極的に求めたからであろうか。それとも、そのような社会的発言を、周囲の門弟たちに誇示しようとしたからであろうか。

もちろん、それが直接の原因でもあるまいが、彼は藩主徳川治宝たちの前で、後日、国学の講義をしている。直接の原因であったなら「提言」直後に機会が与えられたはずであるが、事実は七年後の寛政六（一七九四）年で、若山で講義をしたときには、すでに藩主は変わっていた。その一事からも、彼に対する紀州藩の扱いの程度がうかがえる。それは、紀州藩に召し抱えられた場合も同様であった。彼が五人扶持で召し抱えられたのは寛政四（一七九二）年、六十三歳のときであったが、発端は、加賀藩からの招聘の話であった。それは、学者としての彼の能力を認めたうえでのことではなく、単に自国の学者を他藩に引き抜かれまいとした結果で、所詮、その程度の扱いしか受けなかったのである。

そのような処遇をみれば、紀州藩の彼に対する評価のほども想像でき、それがまた「提言」に対する客観的評価でもあった。そもそも時代に逆行する彼の「提言」は、最初

であった。それは、商業活動を中心に「内需拡大」をはかり、積極的な経済活動を展開しようとする田沼意次の発想とは根本的に異質なものであった。一年間の農業収入を財政規模の基本とする考え方に立つなら、商業収入の拡大は、そのような基盤を混乱させかねぬ危険要素を含むことになり、それゆえにも、きびしい抑制が求められた。質素倹約の精神が高々とかかげられたゆえんである。

田沼意次は、吉宗の農本主義とは反対の立場にあった。彼は商業資本と結託し、貨幣改鋳や資源開発などの一種の重商政策によって幕府財政の再建をはかり、あらゆる産業や商業を専売と運上の網の目にからめとり、代償として商人にさまざまな特権を与えた。

『秘本』における宣長が町人や百姓の「奢り」にいらだち、素朴な生活を主張しつづけた理由は、彼自身が農業主体の発想を基本としていたからである。伊勢商人の本拠地松坂で生活しながら、彼の発想はあくまでも農業中心のもので、商人時代の到来という新しい動きを理解しようとしなかった。「瑞穂の国」への過度の思い込みが、新しい時代の到来を見抜くだけの冷静な目を曇らせていたのである。

松坂で生活しながら、商業的発想に同調できなかった宣長は、いいかえれば、現実界からの直接的な影響を排し現実とは切り離されたべつの位置で生活していたことになる。それは、若い頃、五年半余におよぶ京都遊学時代の彼が、歌舞伎や浄瑠璃、浮世草子や洒落本等々で描かれた当世風の流行にひたりきることができず、そこから一歩離れた位置で、過去の文芸や歴史的逸話にいろどられた世界を追って生活していたときと同じ態度であった。松坂という商業の本拠地で生活しながら、治貞への「提言」でも明らかなように、商人の生活に関しては、おどろくべき無理解ぶりを示しているのもその現われである。

その意味では、京都遊学から帰った彼が、以後三十年間にわたって松坂の町に腰を落着け、町の外へほとんど出なかったことの意味は大きい。商人の町のただ中で生活しながら、彼は「定住者」としての姿勢を崩さなかった。外界の影響から無関係だった彼は、当然、はげしい変化を求めて未知の土地へ出かけたり、さまざまな人間に出会い、そこになにがしかの喜びを見出すといった種類の生活には関心がなかった。それは、生涯であれほど影響を受けた賀茂真淵に対した場合も同様である。彼が実際に真淵と対面したのは、まさに「松坂の一夜」だけで、あとは書簡を通してなされた学問上の意見交換だけであった。彼には、人間との出会いによる新しい発見、たとえば、その表情をよぎる一瞬のかげりや声の調子の微妙な変化などには最初から関心がなかったのである。

いうまでもなく、商業の基本は商品の流通である。ある一点から他の一点への移動によって、同一の商品に新たな価値がつくり出される。とはいえ、新しい価値は、あくまでも他の一点への移動をその条件としている。商人は、その「移動」を生じさせる者であり、したがって、彼らの行動の根底を支えているのは「非定住者」の精神である。一

き、宣長は一体何をしたというのか。「口舌の徒」以上の何をしたのか。彼の思い描いた理想的な色彩で、目の前の現実を染め上げようとしただけではなかったのか。

## 宣長の現実認識

田沼時代は、八代将軍徳川吉宗の「享保の改革」と松平定信の「寛政の改革」の間にあった。定信は吉宗の次男田安宗武の子で、吉宗には孫にあたる。宣長の師の賀茂真淵は、田安宗武に学問をもって仕えたことがあった。

吉宗が八代将軍となった頃は、徳川幕府の成立後一世紀以上が経過しており、家康・秀忠・家光三代で築いた幕府の全国支配体制も時代とともに弛緩しはじめていた。生産力の向上、産業の発達、商品・貨幣経済の発達、都市の繁栄といった新しい時代の動きは、やがて華やかな元禄文化を生み出したが、その一方、支配者の側では、生活が奢侈に傾き、政治は繁雑化し、財政難に陥り、士風は退廃するといった諸問題が発生していた。

「享保の改革」は、そのような幕藩体制の矛盾と幕府財政破綻の打開を目的としたもので、「諸事権現様（家康）御定之通り」が吉宗の口癖であった。享保金銀の改鋳、幕府支出の大幅な削減、一般への厳重な倹約令といった徹底した緊縮政策が強硬に推進された。見方を変えれば、元禄時代以来抬頭してきていた商業資本を抑え、国家本来のあり方を武士と農民に求め、質素倹約、勤倹尚武の精神を基本とする封建的世界の再現をめざしたのが「享保の改革」であった、ということになる。

とはいえ、吉宗の力をもってしても破綻した幕府財政の再建は困難で、ついには御家人の俸禄にも困る状態に追い込まれるにいたった。一万石以上の大名に知行高の百分の一の「上げ米」を賦課し、代わりに参勤交代の在府期間を半年に短縮する施策をとり、あるいは新田開発や殖産興業にも努力したが、期待したほどの成果は上がらなかった。

幕府財政を特に悪化させた原因に、享保の初年以来つづいた米価の下落があった。いうまでもなく、米価下落はその換金率を悪化させ財政を逼迫させる。しかも、皮肉なことに、享保十三年頃からは毎年豊作がつづいた結果、米価はさらに暴落した。幕府はさまざまな米価対策を講じたが、ほとんど効果は上がらなかった。そして、ついに、幕府は元禄時代の悪貨鋳造策に転じ、かつての健全政策も破綻を来し、吉宗の引退とともに「享保の改革」は終焉をみるにいたった。

吉宗の農本主義は、いわば「定住者」の発想で、「瑞穂の国」に生をうけたことを誇りにする宣長の発想と同根のものであった。土地に経済基盤をおき農業生産によってすべてをまかなうなら、一年ごとの収穫高の範囲内で幕府財政を運営しなければならない。全国の総石高が三千万石余のとき、その四分の一弱の幕府直轄領を独占し、一部の特権階級が華美な生活のために浪費すれば財政破綻を招くことは必定であった。

そのような冗費抑制を主眼としたものが「享保の改革」

だったからである。

だが、それにしても、宣長がそれほどまで寛容に容認している信長や秀吉、あるいは家康は、公明正大に見て天照大御神の心にかなっていたのであろうか。

いまの御代は天照大御神の御はからいであり、朝廷の「御任」によるものである、と宣長はいう。また、世の中の変化は神の力によるもので、不都合な点があったとしてもそう簡単に改めることはできない。〈古の道〉に従うべし、と無理に政治や生活を上古のように変えても、かえって現在の神慮に逆らうことになり〈古の道〉にも反する。いまの国政はいまの実状に合わせて従来どおりに行なうのが〈まことの道〉にかなうのであり、掟をよく守り、さかしらな行為を避け、いまの世にふさわしい行為をすることが、すなわち〈まことの道〉の本旨にかなうことである、とも語っている。

人間よりも大いなる存在を容認したところに成立するのが宣長の世界である以上、当然の結論であろうが、逆にいえば、そのような存在を前にしたときの人間は、きわめて卑小な存在と化す。天照大御神の御はからいとか神慮という、人間の知恵を超えた力によって支配されている現実の世界を前提にするなら、小ざかしい人間の判断や批判はまったく無力で意味をなさない。神慮を前提とするなら、その前における人間は一切の判断を停止しなければならず批判も禁じられる。藩主に対する批判などは論外である。上古であれ、現代であれ、そのような卑小な人間の「さかしら」を排し上の定めた掟を守らぬかぎり、〈まことの道〉にかなった行為とはなりえないからである。

けれども、天照大御神の御はからいといい、朝廷の「御任」によるといったところで、所詮、徳川の幕藩体制に対して宣長が与えた説明でしかない。しかも、説明の不備を糊塗するかのように、彼は人間の「さかしら」を排すべきことを力説する。だが、「さかしら」こそ人間の条件であり、人間であることの証拠ではなかったのか。「さかしら」を排除すれば、あとに残るのは判断停止であり無批判な盲信でしかあるまい。

一方、皮肉ではあるが、「さかしら」そのものの説明行為を彼自身が行なっていたのである。説明とは、物事がなぜそうなったのかという根拠を示すこと、あるいは意味づけを行なうことであるが、そのような根拠の提示は人間が相手であるからこそ意味のあることで、すべてを見通す神にはまったく意味がない。しかも、宣長の理想が「さかしら」を排し、ただひたすら信じるだけでなら、説明そのものが自己撞着もはなはだしいことになる。百歩ゆずって説明行為を認めたところで、それによって幕藩体制に一体いかなる影響を及ぼすことができたのか。当初から彼のいう神慮によって幕藩体制が実現されたものであれば、なぜ二百余年ものちに彼の説明が必要だったのであろうか。

いうまでもなく、家康の行動は、そのような説明とは別次元から出発していた。

果敢で壮大なスケールをもった家康の行動にくらべたと

擁護する役割を買って出ることでもあった。彼は、幕藩体制を支持することによって、自分の理想を現実界にしのびこませ、さらにいえば、幕藩体制そのものを自分の世界にとりこもうと試みたのである。

だが、同時に、性急な現実への接近によって、〈古の道〉という彼が理想とする世界の限界があぶり出される結果ともなった。

そもそも、家康を天照大御神に結びつける発想そのものが牽強付会もはなはだしく最初から無理があった。単なる神話でしかなかった『古事記』の世界をまるごとに信じ、天照大御神と天皇との関係を大真面目に力説しつづける態度そのものが最初から不自然であった。そのような無理や不自然をかかえたまま治貞の前に立った宣長は、その果敢な提言にもかかわらず、結局は現実に対して実効のある建策ができなかった。逆にいえば、治貞から無視されたことは、宣長の信念、具体的には〈まことの道〉そのものが現実の世界に根をおろすことに失敗したことを意味する。

それにしても、なぜ宣長はそのような神話を大真面目に受け取り、『古事記』の世界に〈古の道〉という理想を見いだし、その理想の実現を現実界に求めたのであろうか。

その理由は、彼の前における儒仏の存在があまりにも大きすぎたからであろう。徳川幕府にとって、儒教はその存在の根底を支える重要な役割をになっていた。あるいは、仏教もまた長い歴史をふまえ、人々の生活のすみずみまで深く入りこんでいた。先行する儒仏に対して、国学はまだ歴史が浅く、たとえ、定着させうる余地があったとしても、儒仏が支配する世界の周辺にしか残されていなかった。新興勢力の国学の推進者宣長が、先行する儒仏にはげしい対抗意識をいだいたのも無理からぬものがあった。現実界でなにがしかの力を獲得しようとすれば、その支配者である徳川氏に相応の媚態を示すこともまたやむをえなかった。

けれども、徳川氏に妙な媚態を示したとき、彼の存在の根底を支えていた町人としての立場をみずから否定することにもなった。彼は、町人を裏切ったのである。

『秘本』のなかの彼は、町人の分際をこえた「奢り」やその「遊民」ぶりに腹を立て、あるいは、百姓の些細な「奢り」にも目くじらを立てて非難している。彼は町人や百姓を見捨て、彼らとはべつの位置にみずからの存在基盤を求めた。そのとき、彼が近づいて行ったのが治貞であり、徳川の幕藩体制であった。彼らに密着することによって〈まことの道〉の可能性を求め、新しい展開をはかった。幕藩体制の隙間に忍びこむことによって、その権威の末端につらなる可能性をうかがったのである。

宣長が本来の立場である町人や、親しい存在であった百姓を裏切り、はるかに遠い位置の幕藩体制に接近したことは、彼の発想そのものの性格を規定することになった。だが、そのとき、〈まことの道〉は理想主義的な純粋さを喪失し、現実世界に媚態を示すうす汚れた経世論に堕する運命をたどることになった。〈まことの道〉は幕藩体制を支持し、その精神的支柱になろうと試みた結果導き出されたもの

敬するようになり、世の中は平和な時代に戻った。その後、家康が現われて朝廷をさらに崇敬し、再興させたおかげで、古今にもまれなめでたい時代に立ちかえって栄えるようになった、という。

武将の政治は、北条や足利のように仁徳を施し諸氏を手なずけたところで、朝廷を軽んずるかぎり本来の〈道〉にかなうものではない。そもそも武将は、彼ら独自の力では存立しえず、つねに朝廷との関係において正当な位置づけを獲得できる存在だったからである。それは、天照大御神のはからいであり、その流れをくむ朝廷の委任によって、家康以後の各将軍も天下の政治を行ない、また、各大名も天下をさらに一国一郡に分けて預かる位置づけが得られたからである。領内の民や国は各大名の私のものではなく、すべては天照大御神が家康以後の各大名に預けたものである。天照大御神との関係においてこそ家康や各将軍の定めは本来の意味を獲得できるのであり、逆に、もしそのような関係が断ち切られるなら、すべての定めや掟は、将軍や大名の私のものでしかなくなる。

『秘本』のなかでも語られるように、征夷大将軍とは、朝廷をあなどる者を征伐する者につけられた名であるが、同時に、征夷大将軍は天皇の代理者でもあった。宣長の説明によれば、徳川の幕藩体制は、〈古の道〉の具体的な現われであった。「直毘霊」では『古事記』の世界が中心として検討されており、「いまの世」は彼の視界に入っていなかった。おそらく、治貞への提言という性格もあって、急遽、「いまの世」が話題に取り上げられた結果であろうが、宣長は『古事記』の世界から出て、現世へと戻ろうと試みたのである。そのとき、彼の視野の中心を占めるにいたったのが徳川の幕藩体制であった。宣長によって、家康はもちろんそれ以後の各将軍も、天照大御神の心を具体的に実現し、〈まことの道〉にかなった行為を実際に行なっている者と位置づけられたことになる。

そのかぎりでは、〈まことの道〉という用語は、かつては『古事記』の世界の中にしか求められなかった理想が、それ以後の歴史をすべて含んだうえで、現実界にも実際に適用させるために導きだされたものだったことがわかる。〈まことの道〉は、家康をはじめとする徳川幕府の行為を正当化するためのキーワードだったのである。

それは同時に、かつては『古事記』の世界にしか純粋な姿を見いだせなかった理想が、現実の世界にも実現されていることを主張しうる立派な根拠となった。あるいは、皮肉にいえば、〈まことの道〉というキーワードを採用することによって、はじめて彼は治貞の前に立つことができたのである。〈まことの道〉という用語によって、一介の町の国学者が、治貞がその一翼をになっている徳川の幕藩体制の前に立ち、みずからの存在を誇示しうる機会を手にしたのである。

それは同時に、現実界の覇者である徳川幕府の存在を容認し、為政者にまつわりつくことによって、さまざまな矛盾を内包する幕藩体制の意味づけを行ない、その正当性を

ばならない。善神を祀り、幸福を祈るのはもとより、禍を避けるために荒ぶる神を祀って和めるのも〈古の道〉にかなったものである。人間の吉凶禍福は各自の心の邪正や行為の善悪によるものであり、神とは無関係であるというのが儒者の理屈である。自分の理屈だけを云々し、神事をなおざりにするのは例のなまさかしらな唐戎の見識で、神には邪神もあり、よこしまな禍もある、という道理を知らぬゆえのひがごとである。

では、顕事である国政の行ない方、あるいはいかなる人間の行為が〈まことの道〉にかなうものであるのか。それは、上古、天皇が天下を治めていたとき、古語にも「神髄天下しろしめす」とあるように、ただ天照大御神の心を心として万事神代に定まった通りを行い、自分だけでは決定しがたいときには占いで神の心を問うことをいう。何事であれ、自分のさかしらな料簡に従ったりしないのが〈まことの道〉にかなうのである。当時は、臣下をはじめ万民もすべて心が素直で正しく、天皇の心をわが心とし、ただひたすら朝廷を畏れつつしみ、上の掟に従い、いささかのさかしらも主張しなかったので、上も下もよく和合し、天下はめでたく治まっていた。

だが、唐の道が混じるようになると、理屈を云々し、さかしらな料簡が幅をきかせ、下も上の心をわが心とせぬようになり、万事むずかしく治めにくくなり、やがては唐の悪風俗と変わらぬようになってしまった。

世の中の変化は神の力によるものであり、人間の力の及ぶところではない。それゆえ、不都合な点があっても、そう簡単に改められるわけではない。それを〈古の道〉に従うべし、と無理に政治や生活を上古のように変えてみても、現在の神慮に逆らい、かえって〈道〉に反することになる。いまの世の国政は、いまの世の実情に合わせてこれまで通りに行なうのが〈まことの道〉であり、それがとりもなおさず、上古において神慮にしたがって治めたものと同じことになる。君によく仕え、父母を大切にし、先祖を祀り、妻子奴僕をあわれみ、人とのつきあいもよくし、家業に精を出すことは、人間ならだれでも必ずなすことであり、異国の教えの助けを借りなくてもよく承知しており、行なうことのできるものである。いまの世の人はいまの世の上が定めた掟をよく守り、さかしらな行為を避け、いまの世にふさわしい行為をすることが、すなわち神代よりの〈まことの道〉の本旨にかなうことになる。

## 〈まことの道〉

『玉くしげ』の根本は、家康の位置づけにある。すなわち、家康と朝廷との関係がつよく、また、その結びつきが〈古の道〉という理想にかなったものであることを主張したところにある。

宣長の説明によれば、朝廷は、北条・足利の両氏が粗略にしたため、一時的にもせよ衰えていた時期があった。特に、足利時代末期は、天下が真っ暗闇の状態になった。だが、織田・豊臣の両氏が現われて乱逆をしずめ、朝廷を尊

跡形もなくなり、「天下は又しも、めでたく治平の御代に立かへり、朝廷は厳然として、動かせたまふことなし」という状態に戻ったのである。

以上のように、一時的に朝廷が衰えた時期もあった。足利時代末期は前代未聞の状態で天下は真っ暗闇であった。だが、織田、豊臣の二将が現われて乱逆をしずめ、朝廷を尊敬するようになり、世の中はやっと治平に戻った。その後、現在のように天下が治まり、古今にもまれなめでたい時代に立ちかえって栄えたが、これはひとえに東照神御祖命のご盛徳によるものである。衰え果てていた朝廷を織田・豊臣の二将のあとをうけて再興させ、崇敬し、万民を撫治したからである。このような盛業は〈まことの道〉にかなうものであり、天照大御神の大御心にもかない天神地祇もあつく加護するので、世の中がめでたく治まるのである。

このように語ったからといって、べつに時世にへつらっているわけではない。事実、これほど武運隆盛で天下が久しく太平だったことはなく、めでたいことが数多く起こった時代はなかった。

総じて、武将の政治は北条や足利などのように朝廷を軽んずるかぎり、いかに仁徳を施し、諸士を手なずけ、万民を慰撫しようと、すべては、自分のための「智術」でしかなく、本来の〈道〉にかなうものではない。そこに、本朝が異国とはおおいに異なるゆえんがある。国がうまく治まるか乱れるかは、下が上を敬い畏れるかどうかにより、上たる者がその上をあつく敬い畏れるなら、下の者もまたその上の者をあつく敬い畏れるので、国全体はおのずから治まってゆく。

いまの御代は、天照大御神の御はからい、朝廷の御任により、東照神御祖命以来、各将軍家が天下の政治を行ない、それをまた一国一郡と分け、各大名が預かっている。領内の民や国はまったく私のものではなく、すべて天照大御神が東照神御祖命以来代々の将軍家に預けたものである。東照神御祖命の御定めや代々の将軍家の掟は、すなわち、天照大御神の御定めであり、掟であるので、それに背いてはならない。大名たちは国も民も天照大御神から預かったものであることを銘記して大切にすることが肝要で、下々の政治をとり行なう者にもよく指示し、心得ちがいのないように注意しなければならない。

ところで、大国主命がこの天下を皇孫尊に譲り、天神の勅命に帰順したとき、天照大御神と高皇産霊神との間で約束事があった。今後、世の中の顕事は皇孫命が治め、大国主命は幽事を治めるようにというのがそれで、万世不易の定めであった。幽事とは、天下の治乱吉凶、人の禍福など、あるいはそれ以外にも何者が行なったのかわからかぬ「冥の神」の所業をいい、顕事とは、現世の人間のする所業、いわゆる人事であり、皇孫命の顕事とは、すなわち天下を治める政治である。

世の中は、神の御霊なしではかなわぬので、明け暮れその徳を忘れず、天下国家とわが身のためにも神々を祀らね

らである。そのかぎりでは、この〈まことの道〉は、日常生活をまったく無視し、否定したところに〈もののあはれ〉を知ることを求めたかつての発想と同根であった。『秘本』の行間に息づいている現実に対する忿懣は、そのままのエネルギーで〈まことの道〉への思い入れとなって凝縮されていたことがわかる。

『秘本』と併せて提出された『玉くしげ』の主題は、その〈まことの道〉であった。

「まことの道は、天地の間にわたりて、何れの国までも、同じくたゞ一すじなり、然るに此道、ひとり皇国にのみ正しく伝はりて、外国にはみな、上古より既にその伝来を失へり」と宣長はいう。それゆえ、異国ではさまざまな道を説き、自分たちの道こそ正道であると説くが、異国の道はみな大本を離れた枝葉末節のもので、本来の〈まことの道〉ではない。少々似たところがあっても、本来の道とは異なっているのだ、と彼はいう。

〈まことの道〉を知ろうとするなら、まず第一に、この世の中の総体の道理をよく心得なければならない。その道理とは、この天地も諸神も万物もすべてその根本は高皇産霊神、神皇産霊神という二柱の神の、産霊のみたまによって「成出来たる」ものであり、人類が生まれ、万物や万事が生まれたものもすべてこの御霊によるものである、ということである。神代のはじめに伊邪那岐、伊邪那美の二柱の神が国土や万物やもろもろの神を生み出したが、その根本は、すべてあの二神の産霊の御霊によるものであった。そもそもこの産霊の神霊は、奇々妙々な神のしわざであり、いかなる道理でも説明はできず、まして、人間の智恵などでは推量することすら不可能である。

世の中の道理や人の道は、神代の『古事記』と『日本書紀』という古伝説のなかにことごとく含まれている。〈まことの道〉を知ろうとする者は、それらをよく研究し、物の道理を知らなければならない。

異国では各自が道を説き、自分たちの国だけが尊いと主張しているが、しかし、その根本をなす王統そのものが何度も変わっている。そのことからも、彼らの言がすべて虚妄でしかないことがわかるであろう。

わが国は、「天照大御神の御本国、その皇統のしろしめす御国にして、万国の元本大宗たる御国」であり、世界中の国はわが国を尊敬し、心服し、〈まことの道〉に従わなければならない。だが、外国の人々は今日まで〈まことの道〉がわが国にあることも知らず、海外の一小島としかみなさず、妄説を唱えているのはあさましいかぎりである。

世の中には、悪しき事やよこしまな事が多いが、それは悪神のしわざである。もちろん、悪神ばかりではなく善神も存在する。善神と悪神とがそれぞれことを行なうので、時代の経過とともに善悪邪正さまざまなことが起こり、北条や足利のように、天照大御神の皇統にある朝廷を軽視し、姦曲をほしいままにし、武威をふるった逆臣が出現した。そのような逆臣にも天下がなびき従ったため、朝廷を衰えさせ世の中が乱れた。けれども、逆臣の家はすべて滅び、

そのものはつねに正しく、誤りがあるとすれば、秩序の支配下にある個人の側にある。おのれの分際をわきまえず、「分限不相応」に奢るから、それが積り積もって、秩序に破綻を生じさせるのである。

彼の保守的態度が顕著に現われているのは、「新規の事は、大抵はまづせぬがよき」という言葉であり、大抵のことは「旧きにしたがふにしくはなし」という発想であろう。彼には秩序がなによりも大切であり、「新規の事」はすべてそのような既存の秩序を乱し、否定するものとして位置づけられていたことがわかる。

彼は徳川の現体制に対して微塵も疑問をいだかず、まるごとにそれを容認し忠誠を誓う。儒仏に対してあれほど過敏に、かつ挑戦的に論戦をいどみつづけた彼が、なぜ徳川の幕藩体制にはそれほど寛大でありえたのか理解に苦しむところである。それは、藩主徳川治貞に対する卑屈なまでの態度に如実に現われている。「我々如き下賤の者の、御国政のすぢなどを、かりそめにもとやかく申奉むことは、いとも〳〵おふけなく、恐れ多き御事なれ共」という文章は、単なる修辞とも思えない。

そのような彼には、勃興する町人の活力が理解できず、彼らの日常生活そのものも分不相応な「奢り」としか映じなかった。彼自身が町人だったにもかかわらず、彼らの「奢り」が目ざわりだった。特に、彼らの急成長の原因が、金銀の取引という商売の原点を忘れたものだったことが許せなかった。そのような「遊民」こそ、社会秩序を混乱させる元凶であった。そのかぎりでは、伊勢商人の本拠地の松坂に暮らしていながら、宣長は彼らとの間に明確な一線を画していた。

「遊民」の跋扈を許しているのは、投機的な金銀取引であり、無用のものを買いこむ浪費生活である。すべての原因は、かつては物々交換か、小額の銭による商いだったものが、小判に代表される金貨や、丁銀に代表される銀貨という高額通貨の流通により、消費生活が助長されたことにある。かつての健全な商業秩序を回復させるためにも、まず、現物取引を中心に据え、金銀取引は極力、抑制しなければならない。彼には、経済の発展過程などは眼中になく、金銀中心で動いている世の中が腹立たしかった。「今の世は武士も百姓も出家も、みな鄙劣なる商人心になりて、世上の風儀も軽薄になる」のだ、と憤慨する。ここでも、自分の周囲で生活する伊勢商人をあからさまに批判し容赦しなかった。受け入れられるのは、物々交換という素朴な商売をしているかぎりにおける商人であった。

彼にとって大切なものは秩序であった。その秩序を乱す原因は、士農工商の各自がその本分を守らず、そこからはみ出し本業を離れるところにあった。宣長流にいえば、その原因は、各自が「奢り」にふけるからである。そのような「奢り」を抑制すれば、本来の秩序が回復されるはずである。

彼には周囲の現実がまったく気に入らなかった。彼のいう〈まことの道〉から、あまりにもその現実が遠かったか

受せねばなるまい。

武士は「兵術軍法」を第一にし、実際に役立つことを心がけるべきである。武道軍術は、軍談の書を読むがよい。『源平盛衰記』や『太平記』はおもしろいが、時代が古すぎる。織田や豊臣時代のいくさは、古今にすぐれたものである。

天下の大名たちが朝廷を崇敬すべきことは公儀で定められている。現在の朝廷は、実際には政治にたずさわらず、世間からも遠ざかっているため、崇敬の念がなおざりにされているが、わが国の朝廷は神代のはじめから特殊な事情があり異国の王とは比較にならない。一国一郡を治めるほどの人は、この事情を銘記すべきで、それがすなわち、大将軍家に対する第一の忠勤である。征夷大将軍とは、朝廷をあなどる者を征伐する者につけられた名で、東照神御祖命（アズマテルカムミオヤノミコト、家康）がなしとげた大偉業だったからである。

朝廷を畏れ尊ぶことは、東照神御祖命の「大御心」にかなうことである。世間の学者はただ「漢流の道理」を説くだけでこのことを知らぬので改めて言及する次第である。水戸の西山公は格別に志が厚く『大日本史』を修撰したが、そのような行為こそ「道の大本」をわきまえたありがたい心ばえである。このような「明良なる殿」が子孫に生まれたことは東照神御祖命の「御盛徳の余烈」であり、天照大御神の御はからいである。

神社に関していえば、古くは、諸国の小社にいたるまで朝廷がこれを祀っていた。現在では朝廷の力が及ばぬのであるから、諸大名がねんごろに祀るべきである。それにしても、兵乱のために神社が荒廃し、祭典もすたれたのはなげかわしい次第である。神を敬い祀ることはだれでも知っているが、〈まことの道〉の根本の仔細を知らぬため、おろそかな扱いを受けている。「めでたき治平の御世」が久しいのだから、各大名は領内の神社を興して祀り、ときには、みずからも参詣すべきである。

このような仔細は、通例の学者や神道者はまったく知らず、世間でもおおいに誤解している。総じて、世間の人がよい考えと思うものはすべて「唐流」の理屈であり、まことの道理にかなわぬことが多い。領主や役人なども、国のためを思い、災害がおこらず、凶事もなく上下ともに安全に栄えて長久なることをねがうなら、これらの根本の心がけが大切である。

## 『玉くしげ』

宣長の提言の基本的姿勢は、その保守性にあった。天照大御神、天皇、東照神御祖命とつづき、徳川の幕藩体制のすみずみまで秩序が保たれていると考える彼の世界では、それを乱す者はきびしく弾劾された。世の中が困窮し、秩序が乱れるのは、社会機構や生産体制そのものに内在する矛盾によるものではなく、すべて身分不相応な奢りが原因で、それが内部から浸食するのだ、という。百姓たちの困窮は、身のまわりを奢り、出費がかさむからである。秩序

下に通用する金銀を多くするか少なくするかである。

金銀がひろく通用するようになったのは慶長頃からで、それ以前はすべて銭だけであった。金銀のおかげで便利にはなったが、同時に、世の中の困窮の原因ともなった。いまの人々は金銀が多すぎることを知らない。金銀が得がたいのは、それが少ないからではなく多すぎるからである。その原因は、米穀をはじめ品物を取引する際、現物で取引するよりも金銀で換算して取引するほうが便利なため金銀の流通がはげしくなるからであるが、一方では、それが得がたいために世の中の金銀が少なすぎると考えるのである。

金銀の流通開始当初は、べつに弊害はなかった。けれども、金銀で取引をする過程で過分に利益を得る者が出て、品物を動かさず金銀の交換だけを商売にする者が多くなり、士農工商すべてが本業を投げ出して手っ取り早く金銀を手に入れることに血眼になった。金銀の取引だけで利益を得る者は本業を怠っているのであり、それは社会全体の損失である。金銀取引を商売にする者はすべて「遊民」で、そのような者が多いことは「国の大損」で、「世上困窮」の原因となる。金銀が多くなれば便利にはちがいないが、不要のものを買い、無益なことをし、奢りが生じ、「世上困窮」の原因となる。また、上下すべてが金銀のことばかりを考えるので、「今の世は武士も百姓も出家も、みな鄙劣なる商人心になりて、世上の風儀も軽薄になる」のだ、と宣長はいう。

このあたりの経済のからくりについては、後世の現代でも経験することになるが、そのような経済現象に対する処方箋の書き方はいかにも宣長的である。

金銀の通用は一国だけでは解決できないが、以上をよく考え、現物取引を中心に据え、金銀取引はできるだけ抑制すべきである。総じて、物事はたとえ不便でも万事地道がよく、計算高く、便利に走るとかならず間違いが生じ、詐欺や失敗を経験する。国政をあずかる者は、金銀に足をとられぬよう心すべきである。金銀取引を抑制すれば人情も金銀から遠ざかり、各自が本業にはげみ、人間の鄙劣な心や軽薄な風儀も矯正されるであろう。

世の中には、天下国家のため、害になることが多い。けれども、それを急激に禁じるとかえって害が大きくなる。たとえ益があろうと、人間は新規のことをわずらわしく思うもので、「新規の事は、大抵はまづはせぬがよき」ことである。世の中は「時世の勢」によるもので、結局、人間の力ではどうしようもないからである。とにかく、大抵のことは「旧きにしたがふにしくはなし」である。

最近は上下ともに困窮がはなはだしいが、緊急事態の際は年限をかぎってでも家中の祿を減らすしかない。家中の者の難渋は目にみえるが、出費を抑えても駄目ならそれ以外に方法はない。乱世ならどんな艱難辛苦に遭遇したかも知れず、平和な時代のおかげで生命にも別状なく、飢えず、寒からず、安穏に生活できるのだから、君恩を思い、戦場で命を捨てることを思えば、その程度の難儀はしばらく甘

百姓は「町人などの世のおごり」を見習い、困窮が甚だしくなった。町人の奢りにくらべれば、百姓のそれは高が知れているが、そもそもの土台が小さいので、わずかなことでも影響が出る。百姓の奢りとは、たとえば、昔は木綿しか着なかった者がいまでは衿帯などに絹類を用い、藁むしろだった家がいまでは畳を敷き、雨降りには蓑笠草鞋だった者も、いまでは傘をさし、下駄をはくようになった程度のことである。しかし、それでも彼らの出費は多くなっている。

次に、百姓町人どもが大勢徒党を組んで「強訴濫放」に及ぶことは昔の治平の世にはなかったが、最近では珍しくない。そのようなことが起こるのは困難ゆえであるが、結局は、「上を恐れざる」結果であり、「下民の上をおそれざるは、乱の本にて、甚容易ならざる事にて、まづ第一にその領主の恥辱、これに過ぎたるはなし」であろう。

それにしても、いまの町人の奢りはひどい。飲食衣服をはじめ諸道具や住居等、高貴の人と変わりがない。とくに大分限者の奢りは大名にも劣らず、善美をつくし、ゆたかに暮らしている。

町人にはとくに定まった階級がないので、だれもが同じようであるが、財産の大小では雲泥の差がある。その事実を忘れ、富める者を見て羨んで真似をするため困窮者が多くなる。その困窮を隠そうとして無理をし、あるいは、一攫千金をねらってかえって破産する者もいる。

世間が奢った生活をするからこそ商売も繁盛し、金銀も多く流通するわけで、それゆえ、困窮の原因にはならぬようにも思われる。けれども、だれもが身分不相応に奢るので内実は困窮し、商売は多くても代金を支払えぬ者や借金を返さぬ者が多く、売手も貸手も利益が出ず損をする者が多い。また、百姓で商人になる者が多く、商人の数が次第に多くなるため利益がうすくなる。

いまの世は、「貧しき者はます〳〵貧しく、富る者はます〳〵富ことの甚しければ」、上に立って政治をする人のはからいで、なんとかしてその「甚富る者の手にあつまるところの金銀を、よきほどに散じて、専ら貧民を救ひ給ふやうにあらまほしき物也」と宣長は期待をよせる。

人は何事も経済力相応にするのがよい。それ以上に奢るのは悪いが、それ以下にして軽くなってもいけない。大名は大名相応にすべきで、質素がよいからと下々の武士のようになってはならない。倹約がすべてではなく、身分相応に暮らすべきである。

奢りの傾向は年ごとにひどくなってゆくが、少しでも質素の方向へと転換させるべきである。下の者は、良くも悪くも上を見ならうもので、上から生活水準を落とせば家中や下々も見習うであろう。

金銀の通用はその法則により、損をしたり得をしたりさまざまである。金銀はこの上ない宝であるが、飲食や衣服の代わりになるわけではない。何の役にも立たぬものが通用するのは、役に立たぬもので世の中の一切に役立たせようとするからで、そのやりかたで得失がある。それは、天

にはゆかず、かえって害がある。あくまでも、〈道〉の大本を土台とし、その末端の細事までも矛盾しないように心がけ、すべてを進めるべきである。

以上で『秘本』の総論にあたる部分は終わっている。

## 宣長の「提言」

総じて、上中下の人々は、身分相応でなければならないが、最近は上中下ともにその分際よりも重々しくなっている、と宣長はいう。

いまの大名たちは、上古の天子、中古の大将軍などよりも万事の振舞いが重々しくなっている。それに準じて、中下の人々も同様で、たとえば、現在、千石もとっている武士は、昔の一万石か四、五万石の人のように重々しい。このように、おしなべて身持が重々しいため、心持まで分際不相応に重々しく、昔なら大名でも自分でしたことを、いまでは百石か五十石取りの人が、みな下の者にいいつけ、自分ではしなくなっている。「富める町人」などはなおさらである。

振舞いを重々しくすることは、すなわち、「大いなる奢り」である。平人の奢りは本人だけで他に害は及ばない。けれども、「上たる人の奢り」は、その害が領内に及ぶ。平和な時代が長くつづくと、世の中は物事、万事華美になり、身持も次第に重々しくなる。抑制しないでおくと際限なく「世上困窮」し困った事態が発生する。

最近の大名の諸事万端は、十のうちの六、七は省略してもよい。万事を重々しくするため出費がかさみ、結局は損をし、国政の妨げとなっている。

中下の武士も「分限不相応」に身分を重々しくし、物事が華美になり、出費が多くなる。それほど忙しくない者には農作業をさせ、女性には「女工」の仕事をさせてはいかがであろうか。そうすれば、武士は筋骨がつよくなり、武芸にも役立つであろう。

ところで、近来、百姓は「困窮」の甚だしい者が多いが、その原因は二つある。

第一は、世上の奢りの風潮につられ、身のまわりを奢るようになったためである。

第二は、年貢が非常に多いからである。

年貢についていえば、まず上古の唐土では、十分の一が年貢であった。日本でも、大宝時代は約二十分の一であった。しかし、中古よりは制度が崩れ、戦乱の世には、次第に年貢が多くなった。豊臣時代に天下が治まり、法制が定まると混乱はなくなったが、年貢だけは元のままで、徳川時代になっても変らなかった。結局、現在の年貢は戦乱時のまま据えおかれ、「今の世の百姓といふものは、いとも〳〵あはれにふびんなる物」である。それゆえ、「いまの世の百姓は、心身を労する事も、古よりは甚しく、年貢に大いに苦しむものぞといふ事を、朝夕忘れ給はず、不便に思召て」、年貢は定められた以上を課さず、百姓の辛苦が増さぬようにするのが肝要であろう。

それにしても、日々の暮らしが苦しいにもかかわらず、

で、まことにあっぱれで、俗人には及びもつかぬことが多い。

とはいえ、学問熱心で、経国済民の道に通暁し、当世の事情にもよく通達していたところで、儒者はその儒者気質のゆえに、議論の際はもっともらしいが、現実の政事に適用すると意外に不都合で害のある場合が多い。儒者の悪い癖で、先代が滅びた理由を論じ、それを改めれば今度は大丈夫だ、というのが彼らの論法である。けれども、先代の失敗に懲りて改めてみても、結局は長つづきするわけがない。また、彼らはよく「聖人の道」を云々するが、そのようなもので国が治まるわけがなく、そこでもろもろの新法を立てることになる。

古来、唐土の国俗として、旧いことを尊重せず、ただおのれの「私智」で考え、万事を改め、自分の手柄にしようとする傾向がある。それはただ自分の才智を過信し、〈まことの道〉というものを知らぬからである。「儒者の料簡」は、ひたすらかの唐土ばかりを良しとし、自分の心を基準にしてものごとを改変しようとする。それが「儒者かたぎの一種の料簡」というものであるが、世の中には、いかに賢明とはいえ、人間の智恵や工夫では及びがたいものがある以上、そう安直に「新法」を行うべきではない。「すべての事、たゞ時世のもやうにそむかず、先規の有来りたるかたを守りてこれを治むれば、たとひ少々の弊は有りても、大なる失はなきものなり、何事も久しく馴来りたる事は、少々あしき所ありても、世人の安んずるもの也、新に始むる事は、よき所有てもまづは人の安んぜざる物なれば、なるべきたけは旧きによりて、改めざるが国政の肝要也」と記すとき、彼はまちがいなく保守主義者の立場に立っていた。

唐土の治め方などでわが国が治まるはずがない、というと、儒者は、天地は一枚で、人間の人情はどこも同じであるから、唐土であれ日本であれ道に二つはなく、治め方の根本に変わりはない、ことに唐土は「聖人の国」であり、身を治め国を治める道はそれ以外になく、「聖人の道」以外はすべて異端で、正道とはいえない、というであろう。

けれども、そのようなことはだれもがいうもので、べつに珍しくはない。もう一段高い所で考え、「聖人の道」といえど〈まことの道〉にはかなわぬことを知らなければならない。くれぐれも、表面的な議論の美しさにまどわされて、かの国の道に気を奪われてはならない。

ことに、わが国は、異国とは根本的に異なるので、国政を行なう際にも〈道〉の根本をよくわきまえなければならない。

国政とは広く多端で、そう簡単に言葉をさしはさむわけにもゆかぬが、当面のさしあたっての事柄をえらび、いささか愚見を申し述べることにしたい。

本書は、その枝葉末節にいたるまで「根本の意」を土台とし、それに矛盾しないようにつとめたので、事柄次第では迂遠に聞こえるかもしれない。けれども、いかなることでも、まことの道理にそむくなら、いかにもっともらしく聞こえようと、それを実行に移したとき、当初の考え通り

『秘本』および『玉くしげ』の命名の由来は、それぞれの冒頭に詠んだ「身におはぬしづがしわざも玉くしげあけてだに見よ中の心を」という歌による。

「玉くしげ」とは「くしげ」の美称である。「くしげ」は漢字で「櫛笥」あるいは「匣」と書き、櫛などの化粧道具を入れておく小箱で、女の象徴である櫛を人目から覆いかくすものということで大切にされた。この場合は「あけて」にかかる枕詞である。「提言」などということは、わが身にはふさわしからぬ行為ですが、その中にこめられているわたくしの心をぜひ開けて見ていただきたいものです、といった意味であろう。具体的な事情は、『秘本』の冒頭に記されている宣長自身の言葉がもっとも如実に物語っている。

「我々如き下賤の者の、御国政のすぢなどを、かりそめにもとやかく申奉むことは、いとも〳〵おふけなく、恐れ多き御事なれ共、とにかくに御武運長久、御領内上下安静ならんことを、恐れながらあけくれ祈り奉る心から、とあらばやかくあらばやと思ふ事共のおほきところに、吾君御仁徳ふかくまし〳〵て、此度ありがたき思召共仰出され、猶又勘弁の事もこれあらば、隔意なく申出べしとの仰事を承はるに付ては、いよ〳〵つね〴〵祈り奉る心の内のかたはしをも、申し顕さまほしくて、下賤の身分をわすれ、恐れをもかへり見ず、当時うけ給はり及ぶ他国の様子共を、かれこれ引出て、存分のほどをつくろはず、かざらず、此一書に申述侍る也」

この文章にもあきらかなように、彼の歌はかなり忠実にその内心を打ち明けたものだったことがわかる。

同時に、彼は「さて又我々ごとき者の申す事、百千に一つも、取用ひさせ給はんことなどは、思ひもかけ奉らず、たゞ願はくは、かりにも一たび、御目にふれさせられて、御咎だになくは僕が大幸也」と記し、ぬかりなく手先を打つことも忘れなかった。

なお、『秘本』は、もう一方の『玉くしげ』と区別するための便宜的な題名で、藩主徳川治貞に提出したものゆえ刊行はならぬ、ということから『秘本』として位置づけられたものである。

その『秘本』のなかで、本題に入る前に、宣長は冒頭、いくつかの「料簡」、すなわち、考え方を指摘して、その是非を検討している。

まず最初に「学問せざる人の料簡」は、目の前の身近なことに気をとられて「根本の所」にまでとどかぬことが多い、という。次に、「少々学問にたづさはる人の料簡」は、四書五経などの経書をふまえて今日の政事を考えようとする。これは「根本の所」に多少近いが、時世の様子や国情や歴史の相違を忘れているので、今日の政務にはまことに迂遠で、世俗の料簡にも劣る。とはいえ、総体的には当座の利益のみに走る「俗吏の料簡」よりはましである。また、深く学問し、経書ばかりか史書や諸子百家にも通じ、すべてをわきまえ、経国済民をもよく理解した人の料簡は、物事の根本やその具体的な現象についてもよく熟慮するの

う「理想」の世界の追求に没頭していた宣長は、この『秘本』を契機に、現実と対峙することになった。〈もののあはれ〉を知ることを説いていた頃の彼の姿を考え合わせるなら、おどろくべき変貌である。

だが、それにしても、若い頃から用心深く現実との直接的な接触を避け、安全な位置を確保したうえで〈もののあはれ〉を知ることの大切さを説き、〈古の道〉の理想を求めていた宣長が、なぜ突然、「現実」に向かって発言したりしたのであろうか。

おそらく、不穏な社会情勢を見聞きするにおよび、やむにやまれぬ正義感から発したものであろうが、皮肉にも、現実の世界に対する不慣れな発言によって、彼の世界の根源を形成していた「理想」が明るみに出され、その限界があぶり出される結果となった。

とはいえ、それがいかなる思いから発せられたものであれ、現実界に向かっての「提言」であった以上、まず第一に、その実際的な効用が問われなければならない。もし、効用が曖昧なら、そのときは、なにゆえ、そのような「提言」が発せられたのかが問われなければならないのも物の道理というものであろう。

## 『秘本玉くしげ』

本書は、藩主徳川治貞の下問を受けて献上されたとされている。けれども、彼自身の言にもあるように、藩主から直接、下問があったわけではなく、門人の紀州藩勘定方の小役人の勧めを受けて提出したものである。

一方、『玉くしげ』は彼自身が「先年述作せるところなるを、此度相添へ侍る也」と記しているように、かつて書いておいたものを補足的に添付したものである。同書は、尾張藩の重臣、横井千秋の序文をつけて寛政元（一七八九）年に刊行されたもので、執筆は『秘本』よりも早かった。それにしても、天明五年に入門して間もない横井の、しかも、実際は宣長による代作の序文をつけてまで刊行した彼の行動には従来と異質なものが感じられる。

かつて、松坂の町で、伊勢商人の旦那衆を相手に『源氏物語』の講義をしていた頃にくらべると、周囲を取り囲む門人たちにもかなりの変化が生じていた。そして、そのような変化は、『秘本』や『玉くしげ』という作品とけっして無縁ではなかった。勘定方の小役人の勧めがなかったなら、当然、彼は『秘本』を提出することはなく、横井の名を借りた序文をつけてまで『玉くしげ』を刊行することもなかったであろう。

彼のまわりの門人たちが多くなり、その構成が複雑になるにつれて、彼らの影響もあって、宣長自身の行動にも変化が生じた。その意味では、彼が周囲に集めた門人の存在は、目に見える世界だけではなく、精神の世界にまで確実に影響を及ぼしていたことがわかる。彼が現実の世界に対して意見を公表するなどという、従来とは異質な行動に走ったのは、その名を慕って各地から集まった門人に囲まれているうちに「いい気」になった結果としか思えない。

で聞こえていた。天明三年七月の宣長の日記には、その様子がかなり詳細に記録されている。

「朔日ころより東北の方に音あり、近隣の家にからうすをふむ音のことく、どん〳〵と昼夜時々ひゝきなることやます、六日、七日ころことに甚し、七日の夜は、戸障子ひゝき鳴ておそろしくねふりかたし、家によりては朔日ころより戸障子鳴ける家も有りしとそ」とあり、さらに「後によくきけば、信濃国の浅間のたけ大焼なりしとぞ、東海道国々なと同しやうに鳴たり、江戸なとは砂もふれり」と記している。

この大噴火の噴煙が原因で異常気象が起こり、甚だしい冷夏となった。各地に冷害が発生して未曽有の凶作となり、大飢饉になった。すでに前年から秋田藩、松江藩などで米価の騰貴に苦しむ町民や農民が蜂起し、米屋の「打ち壊し」が起こっており、騒動は大坂、京都にまで広がっていた。そこへ、この大凶作である。しかも、大飢饉は天明七年までの五年間にもおよび、奥羽地方では百万人もの餓死者が出たといわれる。

あいつぐ災厄の結果、各地に百姓一揆が続発し、江戸や大坂では大規模な「打ち壊し」が発生し、政情不安は一層激化し、徳川幕府の足元は大きく動揺した。

不安定で異常な社会情勢のなかで、天明四年、田沼意知が江戸城内で傷つけられて死亡、同六年には意次も罷免され、彼が登用した勘定奉行らも処罰され、ついに「田沼時代」は終焉した。

そのような情勢は、江戸の徳川幕府だけではなかった。あいつぐ凶作や物価高、米騒動が頻発する険悪な社会情勢は、宣長の住む松坂を含む紀伊藩や伊勢の国の場合も例外ではなかった。

天明期に入ってからの彼の日記には「今春米価大貴、世上困窮」、「諸色悉大高直、世上甚困窮」といった言葉が何度も記されている。特に、米価に対する関心がつよく、一両あたりの米の量が丹念に記録されている。天明七年五月の日記には「米次第高直、諸国大困窮、但し在々はさほどにもあらず、町方甚困窮、十日頃大坂大騒動、其外南都、若山、兵庫、尼崎等所々騒動、不レ遑枚挙、廿日夜ヨリ廿三四日頃マデ江戸大騒動、江戸中前代未聞ノ騒動也」と、かなり詳細に記録されている。

このような状態は、権力の座にある者にとっては脅威だった。紀伊五十五万五千石のほかに伊勢国の三領十八万石、併せて七十三万五千石の領主徳川治貞は、困難な国状を打開するため、広く領内の識者に治道や経世上の意見を求めた。

天明七年十二月、宣長もその求めに応じた。

当時、彼は五十八歳になっていた。現実の世界に対して慎重な態度をとりつづけた宣長としては異例の出来事であったが、現実の政治に向かって公的に批判的意見を開陳したのである。

『秘本玉くしげ』（『秘本』）がそれである。

『古事記伝』執筆開始以来、二十三年間、〈古の道〉とい

# 〈まことの道〉
## ―宣長の「提言」とその実態―

高　野　敏　夫

# "The Road to Truth" —Why Norinaga made a political Proposal—

Toshio Takano

It was the severe famine during the period from 1783 to 1787 that brought Japan into an extreme confusion. In order to find a way to get out of this suffering, Harusada Tokugawa, the Lord of Kii, publicly announced that he was willing to accept scholars' opinions on politics. Norinaga Motoori was among those who proposed opinions to the Lord. He wrote his ideas and opinions in his book entitled *Hihon Tama-Kushige* (Private Volume: A Beautiful Box of Combs). Until then, Norinaga had been confined in the study of Japanese classical literature keeping himself away from the world. Now, he openly stated his opinion about the politics of his time.

Why did he make such a proposal? What significance did it have for a civil scholar of literature to support the Tokugawa Regime and the Feudal Kingdom of Kii which had no definite policy to make a break-through in the devastating famine?

The proposal of Norinaga was against the benefit of the common people in the Kii Kingdom; it was a kind of betrayal to them. Besides, there was no possibility for an amateur's proposal to have any influence on real politics.

This paper discusses Norinaga's intention of such proposal in relation to his trial to acquire disciples later in his life.

Received Apr.27, 1994

## 天明の大飢饉

宝暦十（一七六〇）年、第十代将軍徳川家治の時代になると、側衆の田沼意次が登用されて側用人、さらには老中になり、しかもその子の意知までが若年寄となり、田沼父子がともに権勢をふるった。意次が側用人になってから罷免された天明六（一七八六）年までを「田沼時代」という。

江戸時代には、全国規模の飢饉が三十五回もあった。なかでも最大のものは寛永末（一六四一～四二）年、享保十七（一七三二）年、天明三～七（一七八三～八七）年、天保四～七（一八三三～三六）年に起こった四回の飢饉で、もっともひどかったのは天明の大飢饉であった。

「田沼時代」も終わりに近い天明三年、浅間山の大噴火があった。四月八日の爆発を最初に、五月、六月と断続的に噴火があり、六月二十八日以後は休みなくつづき、七月六、七、八日の三日間には空前の大噴火となり、上野国と信濃国に甚大な被害を与えた。

この浅間山の大噴火は、伊勢松坂の本居宣長のところま